

佐賀新聞 2014(平成26)年10月24日(金)

④ 従妹中野多津の手毬唄



岡田が画家を志した時の最大の支援者は、母方の叔父中野健明だった。中野権右衛門正弘(山本常朝の叔父)を祖に持つ健明は、長崎の英学塾「致遠館」で学び、維新後はフランス、オランダの公使館勤務を経て長崎県知事、神奈川県知事を歴任した。明治31年、岡田の留学中に54歳で急逝したため、成長した甥の姿を見ることはなかった。多津

は健明の長女で、明治17年生まれ。岡田とは15歳違いの従妹になる。幕末期、中野家は佐賀城下八幡小路に住み、そこが岡田の生家となる(ただし同小路に現在石碑が建てられ、生地とされている屋敷地とは違う所のように)。岡田、中野の一族は、明治5年(ごろ)までには上京し、その後も交流が続いた。

岡田はしばしば健明のもとを訪ね、鎌倉の別荘などでも制作した。黒田清輝との出会いもこの湘南だった。黒田の

知遇を得た岡田は、白馬会会員、東京美術学校助教授、そしてフランス留学と一気に洋画家としての階段を駆け上がる。

『中野多津像』はこうした時代に描かれた。緋色の振り袖に薄紅色の髪飾りが印象的な少女は、五彩を帯びた手毬を持って画家の前に立っていた。多津は10代初めごろと思われる。

緋色の振り袖、薄紅色の髪飾り

その十数年後の明治41年、泉鏡花の伝奇的小説『草迷宮』の口絵を岡田が担当し、そこに再び手毬を持つ少女が描かれた。この小説の主旋律となっているのが手毬唄であり、亡き母の手毬唄を尋ねて諸国を巡る青年の前に登場するのが、幼なじみの真浦だった。

口絵は、手毬を持つ少女が、青年の後背に高々と立ち現れる特異な構図。かつて東京勸業博覧会で岡田が見た青木繁の『わだつみのいろこの宮』をふと連想させる不思議な絵である。(県立美術館副館長



中野多津像(明治20年代後半)

・松本誠一)

岡田三郎助 — エレガンス・オブ・ニッポン 11月16日まで県立美術館で